

コミュニケーションの場を作って明るいまっけに！

C1240345

卯野優菜

1. はじめに

東北公益文科大学（以下、公益大）の新世紀館1階にあるコンビニエンスストア（以下、もっけ）は学生にとって、なくてはならない存在である。しかし、もっけを利用する学生にとって様々な不満がある。本稿では、その意見を元にもっけが今よりも利用しやすいようなコンセプトを考えていく。

2. 問題

現在のもっけの現状は品揃えが少ないことである。今でも必要最低限の道具や食料は買うことが可能で、欲しい商品がなければ取り寄せることもできる。しかし、それでも空いている棚が多いのが見受けられる。食品ロスの観点や売れ残りの心配もあって、あまり置かないようにしていると感じられるが、ほかにも、例えばもっけに置いていない文房具や弁当類が必要な学生は多いと考える。その現状からプロトタイプを考えていきたい。

3. 共感

もっけを利用した学生から話を聞くと、やはり品揃えが悪いことが多く挙がった。文房具など自分がよく利

用している種類がない、パン類も種類がもっと欲しいなどという意見が多数あった。自身も何度か利用したが、やはりお昼の時間を過ぎると当然パン類などの食料がなくなっている。よって、元々準備している数量が少ない状況から品揃えが少ないという不満が生まれてしまうと考える。

4. 課題定義

品揃えが悪いという課題を解決させるために、一番は商品を増やすことが最善の解決策だと考える。しかし、客が増えなければ商品を増やしても売れ残ってしまい現在の状態に戻ってしまう。そのため、まずは客を増やさなければならない。

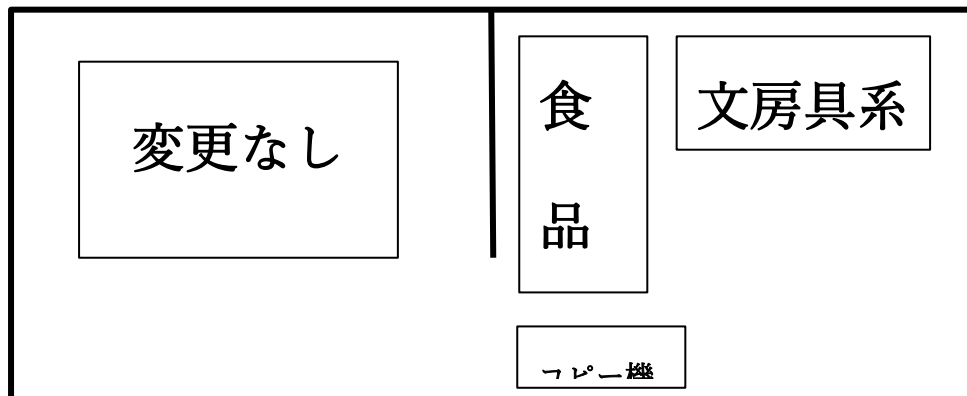
加えて、品揃えのほかに隣の空いたスペースを使用できないかと考えている。教科書販売の際に使用する以外に、その場所が利用されているのを見たことがなかった。そのため、「品揃えを気にすることなく買い物をするにはどうしたらよいか」という課題を立てる。

5. プロトタイプの提案

①コンセプト

コンセプトとして、空いているスペースでリサイクルショップを開催するという提案を挙げる。学生はもちろん、地域の住民も参加することのできる活動とする。このリサイクルショップでは、例えば消費期限や賞味期限が近いが食べない食品、買ったがあまり使っていない文房具、もっけ内の売れ残ってしまった商品などの、各々が持ち寄った廃棄する商品を並べて販売もしくは配布するという活動を月1回ほどの頻度で活動を行う。

②プロダクト（もっけ内）



リサイクルショップをするにあたっていくつかのルールを設ける（例）。

- (1) 持ち込みは何個でも可能だが、持ち帰りは一人5個まで
- (2) 食品は賞味期限または消費期限が過ぎたものは販売や配布はしない
- (3) 生ものなどは持ち込み不可
- (4) 文房具類は使用済みでも可能だが汚れが目立つものなどは持ち込み不可

6. 効果

①もっけに訪れる人が増加する

リサイクルショップを開催することで、必然的にもっけに立ち寄る人が増えてくると想定される。また、利用する人が増えることでその人たちのニーズに応えやすくなる。

②コミュニケーションが増える

リサイクルショップは学生だけでなく、地域の人も参加可能であるため様々な境遇の人とコミュニケーションをとることが可能であるため、学生は今後の学びに、地域の方は若者の考えなどを自身の活動に取り入れやすくなる。また、Liga 食品ロス削減チームのような団体活動もしやすくなる。

③食品ロスの削減、ゴミの削減

賞味期限・消費期限が近い食品やいらなくなった文房具などを持ち寄ることで、捨てる行為が減り食品ロス、ゴミの削減につながる。また、地球をよくしていく取り組みを身近なところでできることもリサイクルショップを行う魅力の一つである。